選抜系統を用いたナバナの早出し栽培法							
［要約］ナバナの早生系統を用いて８月上旬に播種し、ペーパーポットの２５日苗を定植すれば１０月上中旬からの早期出荷が可能となり、畝幅1.2～1.5m、株間30cmの１条植で、追肥を活着後に行えば、最低でも１０ａ当り約１ｔの収量が得られる。							
三重県農業技術センター・栽培部・野菜栽培担当					連絡先	05984-2-6359	
部会名	野菜・花き	専門	栽培	対象	花菜類	分類	普及

［背景・ねらい］

昭和２５年頃から栽培されているナバナは、ナタネの茎葉を利用する特産野菜である。従来は１２月から出荷をしていたが、産地間競争の激化に伴い、有利に販売される早期出荷が求められた。そこで、現地から選抜した早生系統を用い、１０月から出荷ができる早出し栽培の安定化を図るために、栽培条件を検討した。

［成果の内容・特徴］

①本葉が約１５枚展開したときに第１回の収穫をかねた摘芯を行うが、慣行の地床苗と比べてペーパーポット苗は、早く蒔くと収穫適期が早まり多収となる。摘芯後はほぼ毎月１回の収穫が可能となる。早生系統を用いるため３月以降はほとんどの株が蕾を持ち、販売のできない下物が増加する（表１）。

②摘芯時期は播種後１０週目までに行うと上物率が高まる。１株当りの上物収量は粗植が多く、単位面積当りの収量は密植程多くなるので、大面積での作付が可能な場合は１条植で株間を３０ｃｍに、小面積で人手が多い場合は２条植で株間を５０ｃｍにするとよい（図１）。

③追肥は苗活着後の早い時期に行えば１株当りの上物収量が増える。冬期の土壌水分は多いと下物が増え、葉色は明るい黄緑色となり商品価値が低下する。表層腐植質黒ぼく土における畑試験であるが、部分耕起と全面耕起との収量差は認められないので、稲刈り後の作付では部分耕起を行えば省力となり、作業適期幅の拡大が期待できる（図２）。

［成果の活用面・留意点］

元来がナタネであるため、排水がよく肥沃な土壌であれば特に問題はない。しかし、早出し栽培をすると根こぶ病にかかりやすくなるので、慣行の地床苗を使わずペーパーポット等を用いた隔離育苗とする。

［具体的データ］

表１．　１株当り時期別・品質別収量（平成１年）

区（月／日） 播種	定植	摘芯	項目	１０月 上物	１１月 上物	１２月 上物	１２月 下物	２月 上物	２月 下物	３月 上物	３月 下物	合計 上物	合計 下物
8/11	9/5	10/13	本数	1.0	9.6	14.8	6.1	16.0	4.2	1.3	16.1	42.7	26.4
			重量(g)	16.4	148.6	152.1	57.2	298.0	62.6	10.5	116.6	625.6	236.4
8/11	9/5	10/21	本数	1.0	-	5.6	2.2	12.3	4.0	0.0	13.5	18.9	19.7
			重量(g)	15.1	-	75.2	13.9	233.7	60.5	0.0	99.4	324.0	173.8
8/15	9/13	11/2	本数	-	1.0	9.5	2.8	28.1	9.1	5.7	23.4	44.3	35.3
			重量(g)	-	17.4	125.2	26.9	302.7	68.3	47.4	185.9	493.0	301.1
8/15	9/13	11/22	本数	-	1.0	13.9	0.2	18.8	15.7	4.8	20.2	38.1	36.1
			重量(g)	-	15.8	251.2	1.8	214.4	177.8	46.4	157.9	527.8	337.3

上物：15～20 cmの販売に適する茎葉　下物：販売に適さない茎葉（来ねたときに花蕾が見えるもの）
栽培概要：播種；ﾊｲﾌﾞﾘｯﾄﾎﾟｯﾄ（早生系）、栽植密度；1.2x0.5m 1条植、施肥量；窒素27.4kg/10a

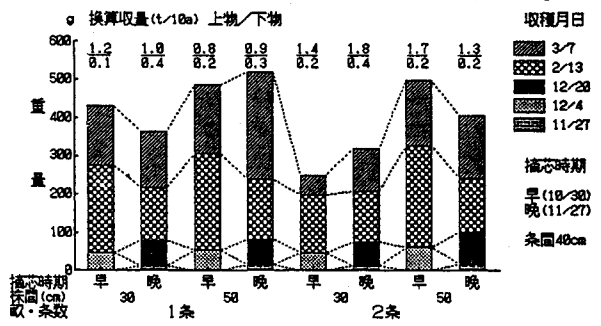

図１．　１株当り時期別上物収量（平成2年）
栽培概要：播種；8/21, ﾊｲﾌﾞﾘｯﾄﾎﾟｯﾄ（早生系）、定植；9/25、
栽植密度；1.2x(0.3,0.5)m、施肥量；窒素31.7kg/10a

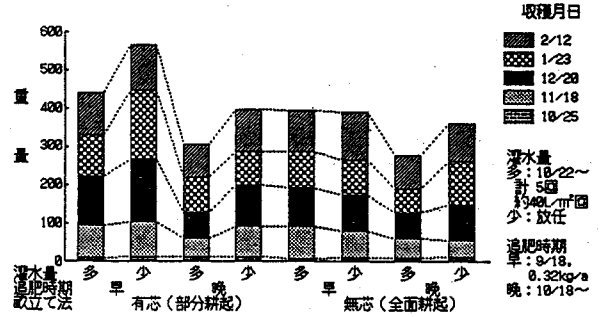

図２．　１株当り時期別上物収量（平成3年）
栽培概要：播種；8/12, ﾊｲﾌﾞﾘｯﾄﾎﾟｯﾄ（早生系）、定植；9/5、栽植密度；1.5x0.3m
1条植、施肥量；窒素33Kg/10a（追肥早区）、29.8kg/10a（追肥晩区）

［その他］

研究課題名：ナバナの早出し栽培技術の確立
予算区分　：県単
研究期間　：平成４年度（平成１～３年）
研究担当者：西口郁夫
発表論文等：